

「朝鮮危機」の根っこにある日本とアメリカの「古傷」を忘れてはいけない

―日本記者クラブ賞受賞で改めて思う中国、韓国との和解の重要性―

ジャーナリスト 松尾文夫



私は五月二十九日、二〇一七年度日本記者クラブ賞を受ける栄誉を得た。受賞の理由は、クラブの発表を引用すると次の通りである。

「共同通信の記者時代から半世紀を超えるライフワークとして米國報道に取り組み、とりわけ近年は被爆地、広島とハワイ真珠湾を日米首脳が訪問し、献花することで真の戦後和解が生まれると熱心に訴えてきた。二〇一六年五月、オバマ大統領が広島を訪問し、一二月には安倍首相が真珠湾を訪れ、提言通りの相互献花外交が実現した。日米戦後史の重要な一里塚につなげた取材と執筆活動が高く評価された。空襲に生き残った体験を出発点に、米英とドイツと『ドレスデンの和解』や世界各地の和解を現地取材してきた。通信社を引退後、六八歳でジャーナリスト復帰を宣言。現場を歩き、当事者を訪ね、執筆を続ける。八三歳でも衰えない旺盛な記者精神は後輩にとってモデルであり、ジャーナリズムの信用と権威を高めた業績は日本記者クラブ賞にふさわしい。」

これ以上の名譽はない。日米首脳による相互献花の提案については、「青淵」誌上でも何度か主張させていただいた。

読者の皆様に心からのお礼を申し上げる。

▽ドイツとの「落差」に驚く

今噛みしめているのは、「あの戦争を経験した最後の世代」に属する一人のジャーナリストとしての責任の重さである。そしてやり残した課題の大きさである。

父親が旧陸軍の職業軍人であったこともあって、私の人生の記憶は一九三六年二月、父の任地であった中国の山海関から、東京で急死した祖父の葬式に出席するため母と一緒に船で帰国するときから始まる。二歳半であった。

その帰りには当時まだ大日本帝国の一部であった朝鮮半島を汽車で縦断した。その後帰国し、小学二年生で太平洋戦争が始まり、その半年後の四月には、東京の戸山でドゥーリツトル初空襲を目撃した。五年生の三学期には父の任地の四國の善通寺でグラマン戦闘機の機銃掃射を逃れ、そして敗戦ひと月前の一九四五年七月一日には、墳墓の地である福井市でB29、一二七機の夜間絨毯爆撃を奇跡的に生き延びる。

今度の受賞の対象となった日米両首脳による相互献花のアイデアも、こうした私の戦争体験の中から生まれた。

一九九五年二月二四日、私は出張中だったワシントンのホテルのテレビで、前夜、ドイツのドレスデンで米英旧連合軍による爆撃五〇周年を弔う手厚い鎮魂の儀式が行われた事実を知った。

日本ではこうした日本流にいえば「お線香をあげる」和解の儀式はまだ行われていない―私は福井市郊外の芋畑でひたすらB29の容赦ない爆撃に耐えた夜を思い出し、強いショックを受けた。これにこだわり続けた私は、一〇年後の二〇〇五年、米ウォール・ストリートジャーナル紙と中央公論紙上に寄稿して、日米相互献花の儀式を求めるキャンペーンを始めた。二年たった昨年、この提案は多くの人々の支持を得、特にオバマ前大統領と安倍首相の「決断」も得て日の目をみた。しかし、中国と韓国との関係は依然和解とはほど遠い。安倍首相のハワイでの「和解の力」演説では、なぜか東アジアへの言及はなかった。今度の栄誉に浴した私は、残りの人生をかけて、この二つの隣国との和解の実現に、ドン・キホーテのように立ち向かいたい。

韓国との関係では、文在寅新政権が登場した今、二〇一五年末の日韓合意で決着したはずの従軍慰安婦問題の「再交渉」が、どのような形であれ避けられないと思う。中国での献花外交では、日本軍による中国人虐殺の数についての日中の食い違いが大きい南京への献花には、時間が必要だとしても、日本軍の無差別爆撃によって一万人を超す死者が出たことは間違いない重慶への献花は、今すぐにでもできる。

▽桂・タフト秘密協定を忘れてはいけない

そして私が一番強調しておきたいのは、今の日本ではほとん

ど論じられることがない、韓国はもとよりフィリピンまで巻き込んだ日本とアメリカの東アジアにおける歴史的な古傷である。日露戦争終結のためのポーツマス会議が開かれている最中の一九〇五年七月、フィリピン総督から陸軍長官に栄転、大統領への道を歩み出したウィリアム・タフトが密かに来日、桂太郎首相兼臨時外相と秘密会談を行った。ここで成立したのが一八九八年のスペインとの戦争の勝利でアメリカが得たフィリピンの領有を日本が認めるのと引き換えに、アメリカは日本の韓国併合を承認するという取引であった。

アメリカの承認を得て五年後に実行に移された韓国併合が、その後の満州、華北、華南へと進む日本の中国に対する「帝国主义侵略」の出発点となり、やがてあの太平洋戦争となる歴史のアイロニーが現在の日本では、ほとんど忘れられている。

しかもアメリカは、日本との併合に反対する韓国の必死の抵抗を無視したのみならず、フィリピンでは、スペイン統治時代から独立運動を展開してきた「フィリピン革命軍」と四年間も戦うことになる。今親中国路線をあらわにし、反米発言もちらつかせ、「南シナ海情勢」を一転させたロドリゴ・ドゥテルテ大統領の登場に、アメリカが手を焼く背景には、フィリピン側に戦死者一万六〇〇〇人を出したこの古い傷跡がある。

韓国の「約束違反」を口にするとき、また北朝鮮の核ミサイル開発の「危機」についての論じるとき、忘れてはいけないのはこの歴史である。

(二〇一七年六月七日記)